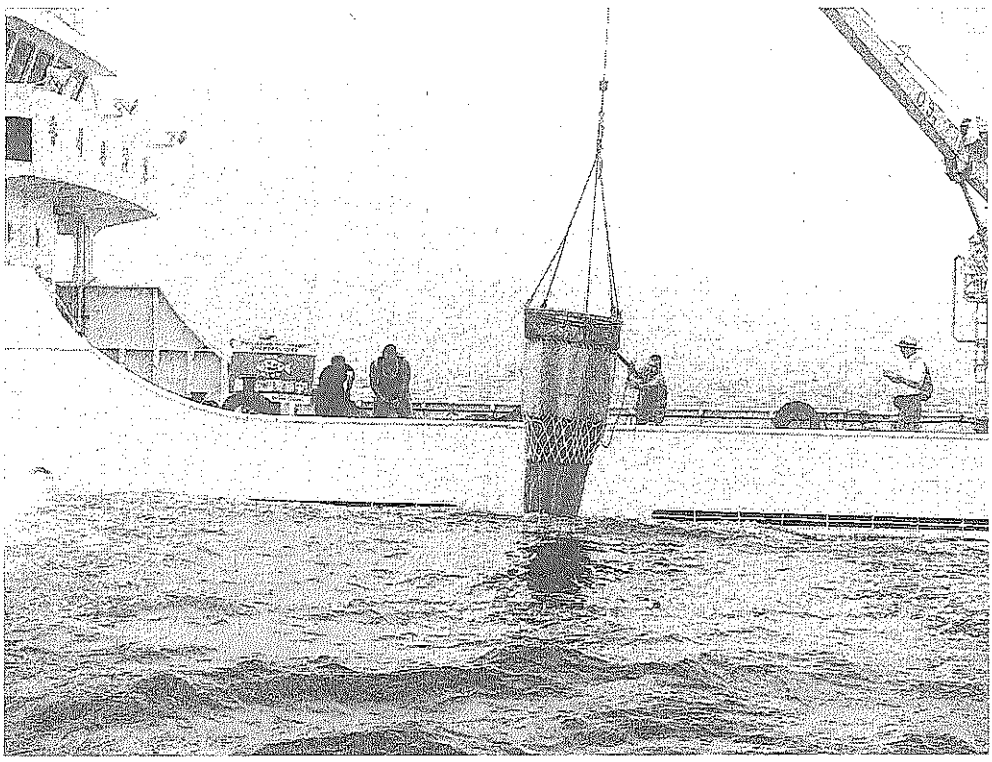


神奈川沿岸にマダイ20万尾

つり環境ビジョン調査型放流着手

クレーンでイケスから海水ごと稚魚を放流

「つり環境ビジョン」事業を推進している（一社）日本釣用品工業会と（公財）日本釣振興会では八月二日（金）、優先三事業の一つである放流事業を実施し、神奈川県の松輪沖と横須賀東部沖、金沢沖の三地点にマダイ稚魚合計二十万尾を放流した。

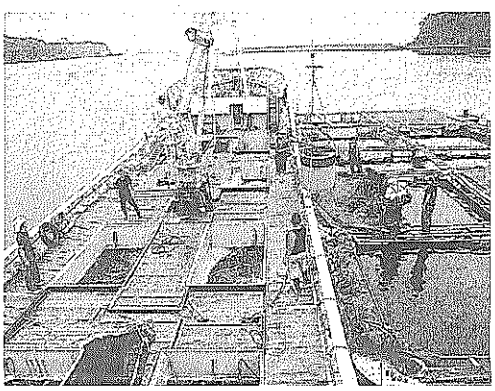
既報のとおり、日釣工と日釣振の共同事業として四月一日から「つり環境ビジョン」からスタートし、優先三事業のうち既に水中清掃を展開しているが、第二弾として調査型放流事業に着手。四月にマダイの受精卵を仕入れ、（公財）神奈川県栽培漁業協会との契約を経て、着々と種苗放流の準備を進めてきた。

放流前日の一日には、神奈川県三浦市三崎町の小網代湾に浮かぶ同協会の中間育成施設でマダイ種苗の計量作業が行われた。

作業は、まず防鳥ネットを外し、網で囲まれたイケスを寄せてマダイ種苗を集めた。海水を入れた樽型容器の重量を計測したあと、素早くマダイ種苗を樽内に入れ、海水とマダイの総重量を計測。総重量から海水の重量を差し引いた数値がマダイ種苗の重量となる。計測後は空の網イケスに移した。マダイ種苗はとてもデリケートなため一連の作業はスタッフ六名の流れ作業にて行った。

計測結果、一網分で約520kg。マダイ種苗は一尾約10gで、一網に約五万尾がいる計算だ。

放流当日の二日はマダイ種苗を中間育成施設から活魚運搬船に移動後、東京湾口の松輪沖に五万尾、横須賀東部沖に十万尾、金沢沖五万尾を放流した。この二十万尾が「つり環境ビジョン」事業の放流総量となる。



活魚運搬船に設置されたイケスに移送（上）、作業を見守る小島忠雄委員長（下）

中間育成施設である海上筏から活魚運搬船にマダイ種苗を移動。魚体を傷付けないために活魚専用の特殊な網を使い、海水と一緒にすくい上げることで、移動時のストレスを最小限に抑える。

活魚運搬船の甲板にはエアレーションのあるイケスが設置され、放流時にはイケスから海へと甲板上のクレーンを使い海水ごと放された。

この日は、つり環境ビジョン委員会の小島忠雄委員長も立ち会い、一連の作業を見守った。

なお、放流した種苗の調査は、鼻孔の欠損で確認する。七月二十九日に同協会が行った鼻孔欠損確認作業では、サンプルとして百尾のマダイ種苗を計測。平均値で体長82・11㎜、体重10・34gだった。また、放流後の追跡調査のため、DNAサンプルを採取して保管した。遊漁船や魚市場関係者らの協力を得て調査を進める計画だ。